

超えるのではなく辿る、二つの文化

解く理系に問う文系

櫻井悟史＋プラダン・ゴウランガ・チャラン十二谷宗二郎＋宮野公樹

そもそも何なのか……。どのような対象についてであれ、どのような専門であれ、考えつめたその深さにより感受し共有されうる全体的思想は、その熟度が高いほど、入り口である二つの文化の重要性は相対的となる。スノーは、二つの文化の解消を教育に求めたが、本企画では、学者たらしめとする研究者の構えに頼る。

この文章で締めくくられている前回の第一回目連載

「学問との再契約」。そのいわんとするところは、かなり重い。専門が「門」であることを強く自覚しつつあえて自分が知らない他の門をくぐる。そこから普遍へと通じる道を登りつめるためには、なぜそれをやるのか、なんのためにやるのか、そしてそれは何をやっていることになるのかという緻密な点検作業の繰り返し。他の門をくぐってはいるが、とりもなおさずそれは自分の門から続く自分の道を省みることと全く同値であることに気づく



左より、村田純、プラダン・ゴウランガ・チャラン、三谷宗一郎、後藤彩子、安藤妙子、櫻井悟史(訪問先である国立国会図書館関西館にて撮影 宮野公樹提供)

のだ。

幸運にも、この問題にいわゆる理系・文系から三名ずつ、合計六名の研究者と挑戦することになった。本論考では、いわゆる文系が理系の研究に触れた経験を報告する。が、それは単なる「研究室訪問記」といったものではないし、そうあつてはいけない。学問との再契約を迫られた研究者個々人は、異世界を知った驚きという表面的な感想を軽々と乗り越え、他の専門を切り、返す刀で自分をも切る。

*

文理の壁、今と昔

「学問との再契約」という課題自体は、宮野が『アステイオン』九五号で既に述べたように、以前から注目され様々なレベルで取り組まれてきた^①。しかし、それで問題は解決されたかというとはなく、より深刻になりつつある。最初の訪問先であつた甲南大学理工学部の後藤彩子准教授の研究室での経験は、色々な意味で印象深

いものであった。それと同時に、自然科学と人文社会科学の再契約はいかに困難な問題であるかを改めて痛感させられた。

後藤が生物学者として長年にわたってアリについて研究していることを知ると、アリのラボを見学することを楽しみにしながらもなぜか妙な感じもした。それは、自分と同じようにある生命体でありながら、まさか「アリ」が研究対象になりうるとは思っていなかったからである。今回の拠点訪問の際、まず後藤から研究内容の紹介をうけたが、高校時代からずっと、いわゆる文系を勉強してきた私にとって、その内容は理解するのが精一杯であった。もちろん、後藤の最先端の研究内容は誰でも容易に理解できるといえるものではない。しかし同時に、自分がなぜこれまで「文系」という閉鎖された狭い分野の中で勉強しなければならなかったのかについても考えさせられた。その時、改めて文理の壁の存在を痛感したわけである。

先行研究でよく指摘されるように、「文理の壁」の起源は決して古くなく、せいぜい一九世紀にまでしか遡れな

い。少なくとも自分が研究上の関心を持っている明治期の知識人の多くは、我々のように文理の壁にぶつかる必要はなかった。ここでは、明治・大正期を代表する小説家の夏目漱石（一八六七―一九一六）と博物学者であった南方熊楠（一八六七―一九四二）の事例を提示し、細分化される前の日本の学問の方法論について考えたい。この二人は、何れも江戸末期の伝統的な教育と明治期の近代的な教育の両方の素養があり、さらには西洋の学問にも通じていた。漱石は、自身が専門とした文学という学問へのアプローチについて次のように述べている。

余は下宿に立て籠りたり。一切の文学書を行李の底に収めたり。文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文学は如何なる必要あつて、この世に生れ、発達し、頽廃するかを極めんと誓へり。余は社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、興隆し、衰滅するかを究めんと誓へり。²

引用文の通り、漱石は「文学とは何か？」を解明するために、文学書を読むのではなく、むしろまず、文学が生成される背景にある心理的、あるいは社会的な必要性を研究しなければならないことを示している。なぜなら、文学書を通して文学を理解することは「血を以て血を洗ふ」ことと等しいと考えていたからだ。だから彼は、人間の美的意識を扱う文学の理解には、人間の心を扱う学問である心理学や、人間の社会的な行動を解明する社会学的な側面からも攻究しなければならないと思ったのである。

実際、漱石はイギリス留学中に眼前にした西洋近代化によってもたらされた学問の細分化を克服しようとしていた。その試みが、一九〇七年に出版された彼の『文学論』であった。その題目からあたかも「文学」を論じた著書であるかのように見えるが、実際には自然科学や文系とあった垣根を超越した内容となっている。漱石の弟子であった寺田寅彦（一八七八―一九三五）によれば、後期の漱石は自然科学の方法論的な方面に強い関心を持ち、専門的な学術誌を読んでいた⁽³⁾。また、長山靖生によると、

原子論や熱力学など現在では自然科学の分野に含まれる内容がしばしば漱石の小説には描写されているのである⁽⁴⁾。

他方、博覧強記で有名な南方熊楠は、漱石とは違って一生を通して大学や研究所といった制度的な学問の世界から距離を置き、在野で研究を続けた。しかし、学知の方法の点においては漱石との少なからぬ類似があった。熊楠は自らの学問について次のように述べている。

小生何一つくわしきことなければ、いろいろかじりかきたるゆえ、間に合うことは専門家より多き場合なきにあらず。一生官途にもつかず、会社役所へも出勤せず、昼夜学問ばかりしたゆえ、専門家よりも専門のことを多く知ったこともなきにあらず⁽⁵⁾。

上記の通り、熊楠は制度化された学問に縛られず、複数の言語能力を持ち、自由に多分野を行き来しながら、「専門家」よりもより専門的な研究ができたわけである。学知に対して広いアプローチを持っていたからこそ、海

外の科学誌である『ネイチャー』や『N & Q』をはじめ、国内の民俗学、文学、生物学、宗教学など様々な分野の学術誌に研究成果を発表できたのである。ここでは、熊楠が書いた数多くの論考の中から一例だけ挙げておきたい。

熊楠は十二支の動物について書いた長編の論文を雑誌『太陽』に三七回にわたって掲載しており、その一つに「虎に関する史話と伝説民俗」（二九一四）がある。熊楠がこの論文で「虎」の名義を論じるためだけに取り上げた参考文献を見れば、彼の学問の方法がよく理解できる。それは、古代ローマの博物学者プリニウス著『博物誌』をはじめとし、一七世紀のイングラント作家トーマス・ブラウン著『プセウドドキシア・エピソードミカ』を経て、明治初期の科学誌『学芸志林』、スウェーデンの農民生活を論じたロイド著『瑞典小農生活』（一八七〇）、スリランカの民族信仰を論じたリウイス著『錫蘭俗伝』、鈴木牧之の越後魚沼の雪国の生活を描いた『北越雪譜』（一八三七）、江戸後期の随筆『世事百談』、平安中期に成立した和歌集『古今和歌六帖』、同じく平安期の小説『源氏物

語』、中国四大奇書とも言われる『西遊記』（一六世紀成立）である。博物学、科学、民俗学、文学、和歌、小説などの多分野からなる世界中の文献であり、今の学問世界では想像すらできない総合的な方法論であった。熊楠が体現したようなこうした広くて非直線的かつ非中心主義な学知の世界を、後にドウルーズとガタリはリゾーム的な学問と呼んだのである^⑤。その意味で、二一世紀の我々の言う「分野横断的な学知へのアプローチ」は、二〇世紀を生きた夏目漱石や南方熊楠が既に体現してみせたものであった。

明治・大正期の日本の知識人は、なぜ漱石や熊楠のように分野横断的な学問の探求ができたのだろうか。興味深い問題だが、紙幅に限りがあるため簡潔にまとめてみよう。それは近代化以前の東アジア地域における学問的方法の影響であった。河野貴美子とウィーブケ・デネケが述べた通り、前近代の日本の学問の手法をなした中国における「文」とは「現代における『人文学』や『文学』とイコールのものではなかった^⑥」。例えば、古代中国の書物である『易経』における「文」の概念は「天文」と「人文」

に大別されており、「天文」とは「天」の「文」、「人文」とは「人」の「文」のことを指している。つまり、「人文」とは「天文」（自然現象）に対して人間によって作り出される現象のことであり、そのなかには今で言う「自然科学」も「人文社会科学」も当然含まれるのである。漱石や熊楠にはこのような日本の伝統的な学問の素養があつたことを考慮すれば、彼らが自由に多分野を行き来できたことは特に不思議なことではない。明治時代に西欧からいわゆる近代的な学問方法が輸入され、我々はいつの間にか狭い分野の「専門家」になってしまった。そして、高度な専門性を持つ人材を最も必要とするのは、教育や学問の世界ではなく、実用的な経済の制度にほかならない。

文理の壁の背景には、資本に還元されやすい教育政策や功利主義への過剰な傾倒、さらには成績至上主義などの要因が挙げられるが、人文社会科学もこうした分断をさらに悪化させたことを忘れてはならない。飛躍的な発展をみせた実用性のある学問としての一九世紀の自然科学に圧倒されるなかで、人文系もまた社会における「必要性」を弁護するために、自然科学と同じようにむやみ

に自らの実用性を主張してきたのである。今日の経済学や社会学はその代表的な事例であろう。

問題ははつきりしているが、必ずしも解決策ははつきりしていない。しかし、近年における文理の壁を超えようとする試みを見ると、絶望する必要はないかもしれない。例えば、昨年刊行された *The Values in Numbers: Reading Japanese Literature in a Global Information Age*（『数字の価値―グローバル情報化時代に日本文学を読む』、コロンビア大学出版、二〇二一年刊）では、著者のホイット・ロングは、非ラテン語系の言語である明治末期・大正期の日本語のテキストのテキスト・マイニングやコンピュータ分析を通して、科学史、歴史教科書、人種差別、世界文学などの視点から日本文学を理解しようとしている。同じく、近年まで「科学」として認められてこなかった「和漢薬」や「アーユルヴェーダ」と西洋医薬の併用の普及も、ある意味では分野横断的な学問の実践である。さらに言えば、現在話題になっている環境問題では、自然科学のみならず、人間の社会・文化的な行動も環境破壊をもたらしている。そのため、環境問題の解決には人

文社会科学的な視点は欠かせない。学問の再契約に必要とされるのは、研究者自身の広い視野であり、そのためには研究者の主体性の再形成が求められる。

最後に、後藤のラボに戻ろう。アリのラボを訪問し、人文社会科学の研究者の一人として、私は今回の経験をどのように受けとめるべきなのかを色々考えさせられた。現代人を特徴づけるのは何よりも「個人」としての人間であり、現在、人類が直面している問題の多くは、こうした功利的な個人主義と極端な自己追求と関わっている。その背景にあるのが「個人」としての人間には計り知れない無限の能力があるという神話である。他方、アリの特徴はやはりその「集団性」にある。先行研究によると、アリには高度な集団的知能や群衆の知恵があり、それは個人としての人間の能力をはるかに上回るという^⑤。もしかすると、「学問との再契約」の成功のカギはアリの集団性にあるのかもしれない。分野を問わずに研究者が協力し合えば、人類が直面している諸問題により良く対応できるのではないだろうか。

（プラダン・ゴウランガ・チャラン・

国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）

*

研究動機と学際と

「学問との再契約」にあたって、特定の学問や研究テーマにはじめて興味をもった瞬間に注目することが重要であると考えた。専門が入り口であるなら、目の前には無数の入り口が並んでいることになり、大抵の人は、そのうちの一つをなんらかの動機をもって選ぶことになる。動機は、解明したいテーマがあるからでもよいし、ある学問が好きだからでもよい。いずれにせよ、専門の門を選ぶ前段階、門をくぐるその瞬間に、「理系／文系」を問わない、研究者に共通する何かがあるのではないか。そのように考えたため、今回の企画に参加した三名の「理系」研究者に聞き取りをした際には、そもそもの研究動機について、特に詳細な質問を行った。

立命館大学理工学部のア藤妙子教授は、微小な単結晶シリコン材料における破壊メカニズムの解明という研究

テーマに取り組んでいる研究者であった。三名の研究者のなかで、自分と一番かけ離れているように思えた分野だった。なぜその研究にたどり着いたのか、想像することすらできなかった。それゆえ、その研究動機は、「学問との再契約」を考えるうえで重要な手がかりになるように思えた。しかし、その答えは単純明快であった。すなわち、「研究室で与えられたテーマだったから」というものだったのである。歴史好きだったようだが、それではなぜ「理系」を選んだのかと問うた際も、「理系」から「文系」への移動はできそうだから「理系」に行つたとの回答しか得られなかった。子どもの頃の話も聞いてはみたが、現在の研究とつながりそうなエピソードはほとんど出てこなかった。

人文社会科学系の研究者でも共同研究をすることはあるが、研究室単位で研究を捉えることはあまりない。教員と指導学生が別のテーマで研究しているなどということもさらにある。自身のことを振り返っても、たしかに研究テーマについて指導教員に相談し、アドバイスをもらったが、根本にあるテーマは自分が生きてきたなかか

ら生じたものであった。解明したいテーマがあつて、そこから学問を選ぶ。あるいは、そもそも特定の学問が好きだという理由から、他でもないその学問を選ぶ。そのような前提があつたため、研究動機の説明が重要であると考えたわけだが、安藤の場合、学問を選んだあとに研究テーマが決まつたようであり、その学問を選んだ理由もあまり積極的なものとはいえなかった。そもその前提部分が異なつていたのである。これは安藤に特有のことというより、いわゆる「理系」ではよくあることなのだろうか。もちろん、今回の企画に参加した後藤彩子のように、アリが大好きで研究をしている「理系」研究者もいるため、一概にはいえないだろう。しかし、研究機材の関係からテーマを変更したり、選んだりしたりするのが難しいという話も伝え聞く。

だが、ここで一つの疑問がわいてくる。「研究室で与えられたテーマ」で研究する「理系」研究者にとつて、「学問との再契約」とは何を意味するのだろうか。社会学者である見田宗介は、そもそも社会学は〈越境する知〉と呼ばれてきたことを指摘したうえで、次のように述べて

いる。

けれども重要なことは、「領域横断的」であるということではないのです。「越境する知」ということは結果であって、目的とすることではありません。何の結果であるかという、自分にとってほんとうに大切な問題に、どこまでも誠実である、という態度の結果なのです。あるいは現在の人類にとって、切実にアクチュアルであると思われる問題について、手放すことなく追求しつづける、という覚悟の結果なのです。（中略）ほんとうに大切な問題、自分にとって、あるいは現在の人類にとって、切実にアクチュアルな問題をどこまでも追求しようとする人間は、やむにやまれず境界を突破するのです。（見田二〇六・七―八）

社会学という学問について語る文脈の上での話であることに留意する必要があるが、ここには「学際」や「文理融合」を考える上で重要なことが示唆されている。「学際」的であることが重要なのではない。問いに対して誠実で

あり、それを追求していく過程で、仕方なく別の専門領域に足を伸ばしていつてしまうのである。私自身のことを少し話せば、私は「どうして人間を殺してはならないとする一方で、人間を殺してもよいとするような社会や制度があるのだろうか」という問いを立て、そこから日本の死刑の研究に取り組んできた。日本に死刑がなぜあるのか、なぜいまのような死刑の形になっているのかを知るためには、法学だけでなく、歴史学の力が必須となる。それだけではなく、その背景にある哲学や思想を研究する必要もあるし、社会的文脈をおさえる必要もある。問いを解明しようとなると、必然的に複数の門をくぐるざるをえなくなる。あるいは、くぐりたくなるといった方が正確かもしれない。

いずれにせよ、見田がいうように、ある研究者が専門領域を飛び越えようとする時というのは、必要に迫られてのものであるように思われる。問いを解明するためには手段を選ばず、ただひたすら問いに向かって突進していった結果、いつの間にか領域を踏み超えてしまっている。そもそも多くの市民たちは、生活していくなかで、

必要に迫られて、意識的に／無意識的に軽やかに知を越境していく。その結果、研究者が考えつきもしないような、興味深い実践や知恵がふくりあげられたりする。既存の学問の枠の中で考えるのではなく、この問いに向かつていく精神から学問を再考すること、それが「学問との再契約」に必要なことではないだろうか。

では、「研究室で与えられたテーマ」で研究する「理系」研究者が、「学問との再契約」を志向するとき、そこには一体どんな必要があるのだろうか。「研究室で与えられたテーマ」で研究することが悪いといたいのではない。そこにどのような「学問との再契約」を志向する切実な問いがあるか分からなかったから、ただそれを知りたいと思っただけである。もし、そのような問いがないなら、そもそも「学問との再契約」はなぜ必要なのかを問い直す必要が出てくるのかもしれない。見田の以下の忠告は重要である。

「領域横断的」であること、「越境する知」であることを、それ自体として、目的としたり誇示したりすること

とは、つまらないこと、やってはいけないことなのです。ほんとうに大切な問題をどこまでも追求してゆく中で、気がついたら立て札を踏み破っていた、という時にだけ、それは迫力のあるものであり、真実のこもったものとなるのです。(見田二〇〇六・八一九)^⑩

安藤にこの企画に参加した理由を尋ねてみた。ここでも、回答は明快で、研究者としてではなく、個人としての興味があったからというものであった。自分の研究では領域横断の必要を感じないが、他分野には興味を持つ。「学問との再契約」というとき、この姿勢も重要である。学問がどんどん細分化してきているなら、細分化したまま、異なるもの同士として肯定することも考えられるからである。近年の大学の現場は、なんでも融合させようとしているがゆえに、いろいろな歪みが生じてしまっている。融合ではなく、もつと互いの距離をあげる方向性も、やはり必要なのではないだろうか。

安藤の研究室を視察した際、自分の研究室とは全く違っていることに驚いたが、研究室単位で研究する魅力は

伝わってきたし、研究室に所属する院生たちと同じテーマで研究するのも楽しそうだと思った。「文系」と同じように、指導教員と学生とでは別々のテーマにした方がよいとか、論文は一人で書いた方がよいとか、そんなことは考えもしなかったし、仮に考えついたとしても、絶対に口にすべきではないとも強く思った。

「学問との再契約」を考える際には、問いに向かつていく精神から学問を再考すると同時に、それぞれの学問分野で形成されてきた文化との距離が重要となるだろう。そのためには、今回の企画のような、実際の現場をふまえたうえでの議論を積み重ねていく必要がある。

（櫻井悟史・滋賀県立大学人間文化学部准教授）

*

それが学問であるなら

「学問との再契約」を目指して文系研究者が理系の研究拠点を訪問する企画・第三弾の舞台は、公益財団法人サントリー生命科学財団であった。同財団は、一九四六年

に「学問や文化を通じて世界の平和と繁栄に貢献する」という理念の下、佐治敬三によって創立された食品化学研究所を前身とし、七〇年以上にわたって生命有機化学分野の基礎研究の発展に貢献してきた。

二〇一五年には大阪・水無瀬から、いわゆる「けいはんな学研都市」に拠点を移した。財団が入所するサントリーワールドリサーチセンターは、地上四階建て、延床面積二万三〇〇〇㎡の巨大な建造物であるが、「水・緑・土壌」を表現するその外観は、豊かな自然に囲まれた京阪奈丘陵と見事に調和している。建物の中は、明るく開放的で、誰もが自由に使えるオープンスペースがあちこちに設けられ、本棚には研究に直接関係のなさそうな資料も並ぶ。研究者の「知の交流」を促すための工夫が随所に散りばめられ、理系の研究拠点に対するステレオタイプなイメージは覆された。

ここで植物と土壌微生物との関わり合いの解明に取り組んでいるのが村田純主席研究員である。植物の根を取り囲む土壌には、その植物の生長を促進・阻害する土壌微生物が存在している。これまで村田は、土壌微生物が

産生する揮発性の成分が、植物の生長を阻害するメカニズムを解明してきた。そしてその一方で、生長を阻害された植物が、周囲の土壤に別の物質を分泌しながら、今度は近くの植物の生長を促進する、という現象も発見した。訪問した実験室では、異なる条件に分けたシャーレの上で、実際に土壤微生物が植物の生長に影響を及ぼしている様子も見ることができた。

研究室の見学を終えた後、同じく、けいはんな学研都市に居を構える国際高等研究所に場所を移して、一人の理系研究者としての村田の認識構造に迫った。話を聞く中で得られた気付きは次の三点に整理される。

第一は、研究テーマの具体性と応用可能性の高さである。多くの理系の研究と同様に、村田の研究は、そのタイトルを耳にしただけでは、門外漢が内容をイメージすることは難しい。しかし、実験室を見学しながら、何度も村田に問いかけ続けることで、次第に研究の全体像を窺い知ることができるようになった。村田によれば、植物の生長を左右するメカニズムの解明が進展すれば、園芸や作物の生産性向上に応用することが期待できるとい

う。筆者が専門とする行政学や公共政策学は、文系のなかでも問題発見・解決を志向していると認識していたが、村田らの追求する実用性はより具体的であり、理系が「役に立つ」と言われる所以を再認識することができた。

第二は、日頃、特定の対象について無意識的に興味・関心を遮断していた自分自身の態度である。人は皆、毎日、何かしらの植物を目にして暮らしており、何が植物の生育を左右するのか、という疑問は、誰が抱いても不思議ではない。常々、講義やゼミの場において、学生に対し、「身の回りの不可思議な現象に目を凝らせば、自ずと問いが浮かび上がってくる」と話している。しかし、村田の話を聞くまで、植物の生育を左右する土壤について、真正面から向き合ったことは一度もなかったことに気付かされた。学問のタコソボ化に対して、人並みに危機意識を抱いているつもりであったが、私の関心は、無意識的に政治・行政・公共政策に限定され、専門外の領域については、疑問を持つとうとすらしてこなかったのである。拠点訪問を通じて、そのような自分自身の態度が立ちあらわれてきたことは衝撃的であった。

第三は、本企画の主題である「学問との再契約」の難しさである。なぜ植物と土壌微生物について研究しているのか、という問いに対する村田の回答は、「まだ説明されていないことが多いから」、「技術的な応用を念頭においた問題解決に寄与できるから」というものであった。第一弾で訪問した後藤彩子や第二弾で訪問した安藤妙子からも同様の回答が得られている。本企画に参加する以前の私も、同じように回答したはずだし、これ以外に回答のしようがないと考えていたはずである。

しかし、本企画において、「学問」とは、研究という行為そのものになぜ取り組むのか、その研究にはどのような意味があるのかを、観念的、歴史的、存在論的に見つめることであると定義される（宮野二〇二一・九〇―九一^①）。すなわち、本企画に参加した私たち研究者が、日夜取り組んでいる個別具体的なリサーチ・クエスチョンを説明する「研究」という行為とは、明確に異なるものとして位置づけられているのである。上述のような回答は、ほとんどの研究者が、論文やグラントの申請書に条件反射のように書き記すことができる。ところが、その

研究の本質的な意味を問われると、答えに窮する研究者は多いのではないだろうか。

そもそも研究者としてのトレーニングを受ける大学・大学院において、自身の研究という行為を観念的、歴史的、存在論的に見つめる機会を持つ人はどのくらいいるのだろうか。文系であれば、まずは自身の関心に従って調査・分析を重ね、具体化したリサーチ・クエスチョンに対して、適切にアプローチする方法を体得することが求められる。理系であれば、当該分野の基礎知識と高度な分析装置の操作方法を習得し、研究室の一員として、一日でも早く、実験の完遂に貢献できる人材になることが期待されると聞く。少なくとも筆者は、眼前の研究課題に取り組むことで精一杯であった。

やがて本格的に研究者として生計を立てたいと考えるようになると、「他の人よりも良い業績をあげること」を意識せざるを得なくなる。そうすれば、学位取得、研究費獲得、就職活動の全てが有利になると耳にするからである。そのうち研究に向かう動機は、研究者自身の内面ではなく、他者の評価という外部に移っていく。単純化

された指標に依拠する業績主義に違和感を抱きながらも、いつしか自身もそこに一定の価値を見出すようになる。そうなってしまうと、わざわざ時間を割いて、研究という行為を見つめ直すことから遠ざかっていくことになる。

結果として、本企画において三回の理系拠点の訪問を終えた現在でも、どうすれば学問と再契約できるのか判然としない、というのが率直な感想である。ただ一つ言えるのは、本企画に参加したお陰で（参加してしまっただけに）、今となつては、なぜ研究するのか自問自答を繰り返すも、どうも腹落ちがせず、気が休まらなくなつてしまった、ということである。そして同時に、おぼろげながら、こうした揺さぶりをかけることが学問との再契約に向けた第一歩になるのではないかと感じている。

（三谷宗一郎・甲南大学法学部准教授）

*

専門という門をくぐった道。それは普遍へと続くと先

に書いたが、そう言い切ることにはためらいもある。それはまだ名残あるポストモダンの潮流における普遍という言葉の取り扱いという意味合いではなく、一即多、多即一の表現困難性による。普遍などという収束点にむけた一本道では断じてなく、ときに分岐し、ときに他の門からの道と交わり、上るものもあれば下るものもある。結果として、普遍は気づかれるものなのだ。それを感じない限り、自分個人の興味関心がなぜ肯定され、コンズにおいて研究の営みとして許されているのか、という問いには答えられない。そこに、税金投入に伴う説明責任といった制度論や課題解決を目指した公益性の話を持つてくるのは容易い。が、それは学者の仕事ではない。

「付記」

今回の訪問にあたり、研究者個々人の関心、動機を出発点として「そもそも何なのか」を問い続けた軌跡のマインドマップを公開します（オンラインホワイトボードMiroにて作製）。また後日、より



レポート的な写真たつぷりの訪問記をWEBアステイオンにて公開予定。

- 〔注〕(1) 宮野公樹「連載企画「超えるのではなく辿る、二つの文化」——学問との再契約」『アステイオン』九五号、二〇二一年、二二四―二三〇頁。
- (2) 夏目漱石『文学論 上』(全二冊)岩波書店、二〇一六年、二〇頁。
- (3) 寺田寅彦「夏目漱石先生の追憶」(小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集』第三卷)岩波書店、一九九七年、二九〇頁。
- (4) 長山靖生『鷗外のオカルト、漱石の科学』新潮社、一九九九年。
- (5) 南方熊楠「履歴書」Ⅱ矢吹義夫宛書簡(一九二五年一月三一日)『南方熊楠全集』第七卷、平凡社、一九七一年、六一―六二頁。
- (6) ジル・ドウルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトール——資本主義と分裂症』宇野邦一ほか訳、河出書房新社、一九九四年。
- (7) 河野貴美子、Wiebke Denecke 編『日本「文」学史——第一冊「文」の環境』勉誠出版、二〇一五年、一―六頁。
- (8) 西森拓「人はアリに学ぶと、理想的な社会をつくれる!？」
https://www.meiji.net/it_science/vol313_hiraku-nishimori
(二〇二二年七月一〇日確認)

- (9) (10) 見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書、二〇〇六年。

- (11) 宮野公樹『問いの立て方』筑摩書房、二〇二一年。

安藤妙子 (立命館大学理工学部機械工学科教授)

Taeko Ando

名古屋大学工学部航空学科卒業。同大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻博士前期課程、博士後期課程修了。博士(工学)。日本学術振興会特別研究員、名古屋大学大学院工学研究科講師、立命館大学理工学部准教授などを経て、2021年より現職。マイクロマシンやMEMS (Micro Electro Mechanical Systems)を開発する上で必要な、材料評価や製作方法の開発などの基礎研究を行う。

後藤彩子 (甲南大学理工学部生物学科准教授)

Ayako Gotoh

東京都立大学理学部生物学科卒業。東京大学理学系研究科生物科学専攻修了。愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程修了。博士(農学)。自然科学研究機構基礎生物学研究所特別協力研究員、同生理学研究所専門研究職員、日本学術振興会特別研究員(琉球大学)、甲南大学講師を経て、2019年から現職。アリの生態を探索する研究をしている。サントリー生命科学財団「サントリーSunRISE」採択者。

櫻井悟史 (滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科准教授)

Satoshi Sakurai

1982年生まれ。立命館大学文学部卒業。同大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員、サントリー文化財団鳥井フェローを経て、現職。専門は、犯罪社会学、文化社会学、歴史社会学。主な研究テーマは、日本の死刑とキャバレー。単著に『死刑執行人の日本史——歴史社会学からの接近』(青弓社)がある。

プラダン・ゴウランガ・チャラン (国際日本文化研究センタープロジェクト研究員)

Gouranga Charan Pradhan

1978年インド生まれ。2013年インド・デリー大学東アジア研究科修士課程修了。2019年総合研究大学院大学国際日本文化研究専攻博士課程修了。博士(学術)。2017~2018年サントリー文化財団サントリーフェロー。専門は日本文学・比較文学・日本研究で、日本の古典文学の国際的な流通と受容をはじめ、翻訳論・世界文学論に関する研究を行う。近刊に『世界文学としての方丈記』(法蔵館、2022年)がある。

三谷宗一郎 (甲南大学法学部准教授)

Soichiro Mitani

1989年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。同大学院政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学。博士(政策・メディア)。サントリー文化財団鳥井フェロー、医療経済研究機構研究員などを経て、2021年から現職。専門は行政学、政策過程論。主な著作に「医療保険政策をめぐるアイディアの継承と変容」『年報政治学』2016(2)、「時限法の実証分析」『年報政治学』2020(1)などがある。

村田純 (サントリー生命科学財団生物有機科学研究所主席研究員)

Jun Murata

1996年京都大学農学部卒業、2002年奈良先端バイオサイエンス研究科博士後期課程修了。NEDOフェロー、カナダBrock大学博士研究員、奈良県中小企業支援センター博士研究員を経て、現職。専門は植物生化学、植物特化代謝、根圏環境生物学。植物の低分子化合物がどのような生理機能を持ち、どう作られているかを明らかにしていきたい。

宮野公樹 (京都大学学際融合教育研究推進センター准教授)

Naoki Miyano

1973年生まれ。立命館大学理工学部卒業。同大学院博士後期課程修了。カナダMcMaster大学、立命館大学、九州大学を経て、現職。専門は大学論、学問論、科学技術政策。京都大学総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験ももつ。研究・イノベーション学会理事。一般社団法人STEAM Association代表理事。近著に『問いの立て方』(ちくま新書)がある。